

28 13歳が「タレント本」から「人間関係」の難しさを学んだ

「まったく読書をしない人の家に、1冊だけ置いてある本を作りたい」という企画から生まれたのが「矢沢永吉激論集成りあがり」（1978年刊）。矢沢氏がスターになるまでの苦労話が面白く、ただの「タレント本」と侮れません。（蛇足ですが、村上春樹氏だって2021年刊「ブルーラス」の中で、ブルース・スプリングスティーンの自伝を「手放すことのできない51冊の本」に上げています）。バンド「キャロル」の誕生日前、将来の不安から次から次にメンバーは矢沢氏のもとを去る。後に「NOBODY」で一世を風靡する木原敏夫氏も去ってしまう。その後、キャロルやソロ活動で大スターになった矢沢氏は当時のメンバーに声をかけ共に活動するが、「最後までとにかくついてきてくれた。でも最後の最後にやめた」木原氏に「イジワル」して声をかけない。最後まで支えてくれた感謝より、最後の最後に見放された恨みの方が勝ったということか。この矢沢氏との確執を書き残した（2004年刊「キャロル夜明け前」）のがジョニー大倉氏。デビュー曲「ルイジアンナ」のレコーディング中。矢沢氏の作った曲に良かれと思い助言したジョニー氏にキレる矢沢氏。なだめるためにスタジオの外で彼のリーゼントをそっと櫛で整えてやるジョニー氏。そこから対等だった二人の関係は変わってしまったという。

夏目漱石が子どもと活動写真を見に行き、いちいち「あの人 いい人？悪い人？」と問われて閉口したと書き残していますが、人間関係はまさにどちらかが正しくて、どちらかが悪いと単純に割り切れるものではないわけです。

「友情」に関するテレビ番組（2023年放送）の中で、作家の重松清氏が読者からの手紙で、友達のできない悩みではなく、友達がいる大変さを訴えるものが増えてきたと語っていました。「みんなで一緒にいたら疲れる、本当の自分が出せない」という悩みが大きいようで、「自分らしさ」を守ることが今の子どもたちには一番大事なわけです。そして、人間関係が一番の悩みの種であることはいつの時代も変わらないようです。

春先に話題になったテレビドラマ「不適切にもほどがある！」。悩めるクラスメートを未来からやってきた少年が励まします、「学校なんてさ。自分と気の合わないやつが存在することを勉強する場所だけさ。3年かけて、自分以外は頭おかしいってことを確認する場所だけさ。その中で一人二人友達が見つければ、他は死ぬまで会わなくていいやつらだから」。人間関係の煩わしさを解決する名アドバイスの一つだと思いますが、私からは正反対のアドバイスを付け足します。それは「自分らしさ」を守るためには、他人の自分らしさである「他人らしさ」を守るというものです。つまり、人は違うから面白いんだと思います。自分と同じような人間ばかりの世界なんてひどく退屈な世界だと思いませんか。「相手を変えることが無理でも自分を変えることはできる」と譲ったとしても、そのことで新しい「自分らしさ」に気づく可能性はゼロではありません。それに回り道になっても、他人らしさを認めることで自分らしさも認めてもらえるマジで信じています。

さて、木原氏が矢沢氏と共に活動するようになったのは、1977年に発売されたソロ3作目「ドアを開けろ」から。今、「金言」(!?)を作ってみました。「一つのドアが開けば、自ずと別のドアも開いていく」。ちなみに、「OPEN YOUR HEART」がアルバムの英語タイトル。私の考えた「金言」のドアも同じ「こころ」の意味で取ってもらえると嬉しいです。

令和6年7月1日 大村城南高等学校長 中小路尚也